様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）
研究期間：2021～2023
課題番号：２０ＫＫ０２７４

研究課題名（和文）近代家畜貿易と家畜衛生のグローバル化　―太平洋圏と大西洋圏の比較史―

研究課題名（英文）The Globalization of the Livestock Trade and Animal Health in Comparative Perspective

研究代表者
光田　達矢（MITSUDA, Tatsuya）

慶應義塾大学・経済学部（日吉）・准教授

研究者番号：９０５４９８４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,600,000円
渡航期間：　24ヶ月

研究成果の概要（和文）：基課題は、大衆肉食社会への扉が開かれた１８６０年代から１９７０年代を対象期間に据え、ドイツと日本が歩んだ対照的な道を分析することで、国際的に議論されている肉食化と脱肉食化問題に比較史学に基づく貢献を目的とした。本国際共同研究は、ドイツと日本の事例を考慮しつつ、よりグローバルな視点の導入を目指したものである。その結果、肉食化で先行する西洋諸国の影響を受けつつも、①肉食化の実態　②洋種の受容　③味覚の問題　④脱肉食化の特徴などで多くの相違点があったことが判明した。今後は、国際学会での報告や論文出版に留まらず、よりグローバルな視点に立った単著を執筆する下地をつくることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、西洋諸国中心に拡大していった肉食化と脱肉食化の歴史を見直し、非西洋諸国における肉食化と脱肉食化の経緯を理解することで、世界的に議論されている肉食論・脱肉食化論の相対化を図った。その結果、肉食化と脱肉食化は、世界各国にて一筋縄ではいかなかったことがわかった。肉食化の場合、洋種の輸入は必ずしも成功はせず、非西洋種との交配を通してようやく牛肉の大量生産が実現するようになった。一方、脱肉食化の場合、これも西洋諸国における菜食主義運動を模倣したものでは決してなく、伝統食が菜食料理に近いことから、自国料理の優位性を訴える菜食主義運動がしばしば起こった。

研究成果の概要（英文）：The international collaborative study aimed for a global perspective behind the process of 'meatification' and 'de-meatification', looking to correct the western-centric narrative that has so far dominated the field. As a result, the study revealed that there were many regional differences in relation to meatification, the acceptance of Western breeds, the issue of taste, as well asthe characteristics of de-meatification. The impact of western countries, where the meatification process was advanced, was not small but the various ways in which other countries dealt with both meatification and de-meatification suggest significant differences with the Western experience, a perspective that must be incorporated into discussions about how the world should deal with reducing the impact of meat on the environment and society. Thanks to this research, the foundations have been laid for the writing of a monograph that better reflects the diverse experiences countries went through.

研究分野：歴史学

キーワード：食肉　グローバルヒストリー　菜食主義　肉食化　脱肉食化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、アジアを中心に食肉消費が飛躍的に伸びているため、生産･安全･生活への影響を案じる声が国際的に強まっている。世界的に拡大する畜産業が及ぼす環境破壊、抗生物質の乱用による家畜感染症リスクの増大、過度な動物性食品摂取による健康被害など、「肉食化」に対する警戒がかつてないほど高まっており、ベジタリアンやビーガンに代表されるような「脱肉食化」の動きが活発である。

ただ、これまでの肉食化･脱肉食化研究は、西洋先進国を中心としたものが多く、非西洋諸国における肉食化･脱肉食の経験を十分に歴史学的に解明されていない。欧米を筆頭に家畜･食肉貿易が国際化したこと、洋種が肉食化の主要種として世界に移植されたこと、また、米英に範をとる形で菜食主義運動が各国で台頭したことなどが明らかになっている一方、植民地や非西洋諸国における国際家畜･食肉市場の影響、家畜の大型化に登用された種の多様性、国際的取引を可能とした科学技術導入の紆余曲折、脱肉食化運動の異なる特徴は未解明の部分が大きく、研究状況はバランスを欠いていると言わざるを得ない。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような西洋中心史観をベースとした肉食化･脱肉食化の先行研究からの脱却を目指し、英語による研究成果に拘ることで肉食化･脱肉食化に関する国際的な議論へ貢献することを目的とした。すなわち、グルーバル･ノース（Global North）と呼ばれる諸国における肉食化･脱肉食の経験を考慮に入れつつも、グローバル･サウス（Global South）と呼ばれる諸国にも視野を広げ、より国際的な観点から肉食化･脱肉食化の実態を浮き彫りにすることをゴールに据えた。その際、これまで取り組んできた日独における肉食化･脱肉食化研究をベースに、非西洋諸国における肉食化･脱肉食化の国際比較研究を企図した。

3. 研究の方法

家畜史研究の国際的権威である Dorothee Brantz ベルリン工科大学教授の研究グループに2年間所属したうえ、ベルリンを拠点にヨーロッパの研究者との交流を積極的に図り、主にワークショップ･国際学会･成果出版といった3つの方法で研究を進めた。当初は、日本と東アジアの研究者との交流を深めるというもう一つの目的があり、国際学会を東京で開催する計画を立てていた。しかしながら、国際的な物価高騰と歴史的円安の影響は免れず、当初の研究計画を大幅に変更せざるを得なかった。その結果、ドイツに2年間渡り、ヨーロッパ各国の学会への参加とすることで、肉食化･脱肉食化の国際史的な実態に迫る方法に切り替えた。

4. 研究成果

肉食化･脱肉食化をテーマに、以下の通り国際学会で5度研究発表を行い、非西洋諸国を対象に同テーマに取り組む研究者と、比較研究を実施できた。その結果、日独における肉食化･脱肉食研究に従事するあまり気づかなかったが、グローバル･サウスにおける肉食化･脱肉食化の実態が浮き彫りになった。

まず、自分の研究であるが、“Livestock as Global and Imperial Commodities Workshop”（2022 年 7 月）、“Nourishing Values, Feeding Differences Workshop”（2023 年 3 月）、“Consuming Asia”（2023 年 6 月）、“Crossing Boundaries: Human-Animal Relations from Post-Petrine Russia to the Soviet State Workshop”（2023 年 6 月）、“European Society for Environmental History”(2023 年 7 月)で発表した研究成果が議論を呼び起こし、非西洋諸国を研究対象とする研究者の間では、肉食先進国ではなかった日本が、英国の畜産モデルを導入しながらも洋種に基づく家畜の大型化を取りやめ朝鮮牛の純血度を高める政策転換に切り替えたことが関心の的となった。

また、各国の多くの研究者と議論していくなかで、今後、同テーマを国際研究としてさらに発展させる土台を築けた。“Livestock as Global and Imperial Commodities Workshop”では、イスラエル、マダガスカル、モザンビーク、チリ、ブラジル、キューバ、ナイジェリアの研究者と、旧植民地国を研究する人々と国際ネットワークを構築した。“Nourishing Values Workshop”では、台湾、タイ、インドを研究対象とする研究者と、“Crossing Boundaries Workshop”では、ウクライナ、ロシア、ハンガリーの研究者と、“Consuming Asia Conference”では、インド、ベトナム、ブータン、中国、韓国の研究者と議論を重ねた。“European Society for Environmental History”では、パレスチナ、ロシア、アルゼンチンを対象に研究する研究者とパネルを組んだ。 これらの学会での発見を発展させ、今後、上記の問題意識に沿った議論を経て、植民地史に関する成果を国際ジャーナルの special issue として、アジア太平洋に関する成果を論文集としてハワイ大学出版社から刊行する準備にすでに取り掛かっている。

これらの共同研究を通して、4つの新たな史実が浮かび上がった。また、この成果を、4本の論文に盛り込むことができた。

1つ目は、西洋先進国を中心に発展した家畜貿易と食肉輸出の国際的な影響である。高い購買力を武器に、米国と豪州のような供給国から英国やフランスに食肉がもたらされたが、非西洋諸国における状況が徐々に明らかになっていった。例えば、帝政期ロシアは、世界有数の家畜大国でありながら、輸出どころか新大陸産の食肉を輸入していたという史実がある。ウクライナを中心とした国内畜産業の改良政策が順調に進まなかったようで、サンクトペテルブルク市民はロシア産食肉より外国産を選んだとの指摘がある。各国の畜産業が新大陸産食肉の脅威に対応しながらも、各国における畜産業の発展度合との兼ね合いから、輸入に頼らざるを得なかったことが明るみになった。

2つ目に、肉食先進国から品種改良を繰り返された洋種が世界中に出荷されたことはわかっているが、受入各国における状況が少しながらわかってきた。英国種をニュージーランドに移植する過程で、その土地への順応に困難が伴ったことはわかっている。一方、ブラジルでは、熱帯気候であるがゆえに洋種は適さないと判断され、似た飼育条件を有するインドからゼブ種を迎え入れたことが明らかになり、洋種に必ずしも依存しない肉食化が見て取れる。つまり、環境条件の異なる国々の事例を積み重ねることで、肉食化の背景に多くの種が関わっていたことが浮かび上がった。

3つ目は、科学技術が介入する食肉をめぐる味の問題である。牛肉や豚肉が国際的に取引されるには、経済的なコストと技術的な問題を解決しなくてはならないが、遠くから運ばれてくる冷凍肉を抵抗感なく食べるようになるには、社会文化的なハードルが立ちはだかる。例えば、マダガスカルでは、豊富な家畜資源がありながらも、牛肉の硬さが仇となりフランスでは受け入れられなかったし、日本では、中国・青島牛の味に抵抗感を示す精肉店や消費者が戦前に多かったため、専門店が青島牛を独自に扱うようになったことが明らかになった。長距離輸送に対する不信感は日本以外でも根強く、非西洋諸国において食肉の味を巡る攻防が展開されていたことがわかった。

4つ目は、脱肉食化の異なる実態である。肉食化の進んだ西洋諸国では、菜食主義運動は大量生産・大量消費を疑問視するスタンスが共通としてあったが、肉食化が必ずしも進んでいなかった非西洋諸国における脱肉食化運動の特徴を明らかにすることができた。例えば、肉食化がほとんど進んでいなかったイタリアの菜食主義運動は、伝統料理の非肉食性を誇示する性格を帯びており、他の先進国のように新たな代替料理を考案するような現象は起きなかった。日本も似たような状況にあり、植民地や非西洋諸国の事例を分析すると、伝統食こそ菜食料理としてみるに相応しいという論調が多く見受けられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Mitsuda Tatsuya	４．巻 0
２．論文標題 From Colonial Hoof to Metropolitan Table: The Imperial Biopolitics of Beef Provisioning in Colonial Korea	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Global Food History	６．最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/20549547.2022.2159708	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 Questioning Meat: Voluntary and Involuntary Vegetarianism in Modernizing Japan
３．学会等名 12th Conference, European Society for Environmental History（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 In Search of Cattle Plague in the Steppes: Imperial Russia as Epizootic Source in Nineteenth Century Europe ’
３．学会等名 Crossing Boundaries. Human-Animal Relations from Post-Petrine Russia to the Soviet State (1725-1991)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 After Embracing Meat: Buddhist Negotiations of Vegetarianism in Interwar Japan
３．学会等名 Nourishing Values, Feeding Differences (Religious) Foodways Compared（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 From Colonial Hoof to Metropolitan Table: Imperial Biopolitics and the Commodification of Korean Bovine Bodies
３．学会等名 Livestock as Global and Imperial Commodities: Economies, Ecologies and Knowledge Regimes, c. 1500-present, Commodities of Empire International Workshop（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mitsuda Tatsuya
２．発表標題 Making Way for Foreign Cattle and Beef: Imperial Entanglements, Scientific Interventions, and the Threat of Unfamiliar Bovine Bodies in Modernizing Japan
３．学会等名 Asian Studies Conference Japan (ASCJ)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 Powering Japanese Bodies: The Imperial Biopolitics of Provisioning Korean Beef and Cattle
３．学会等名 Imperial Foodways: Culinary Economies and Provisioning Politics (UCLA, Santa Barbara)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tatsuya Mitsuda
２．発表標題 Zur Entwicklung der Veterinaerpolizei im 19. Jahrhundert
３．学会等名 Forschungsseminar, Geheimes Staatsarchiv Preussischer Kulturbesitz (Berlin)（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

1．著者名 Finn Arne Jorgensen, Dolly Jorgensen	4．発行年 2024年
2．出版社 University of Pittsburgh Press	5．総ページ数 336
3．書名 Sharing Spaces Technology, Mediation, and Human-Animal Relationships	

1．著者名 H.L. Meiselman	4．発行年 2024年
2．出版社 Springer	5．総ページ数 -
3．書名 Handbook of Eating and Drinking	

1．著者名 Hallam Stevens and Angela Leung	4．発行年 2024年
2．出版社 University of Hawaii Press	5．総ページ数 -
3．書名 Crafting everyday food: technology, tradition, and transformation in modern East Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ドイツ	ベルリン工科大学			